

ザ ラスト ゲーム (The Last Game / اللعبه الأخيرة)

死刑を宣告された人はこう尋ねられる。「刑が執行される前の最後の願いは何ですか？」私の知る限り、ほとんどの囚人は特別な食事を求めるそうです。

戦争が長引き、自分がまだ生きていると感じるたび、同時に終わりが近づいているのを感じるようになります。少しづつ自分の中に忍び込み、自分なりの方法でこの世界に別れを告げ始めます。例えば、友人、隣人、同僚など、出会った人すべてに良い印象を残そうとしたり、必要なものを（可能であれば）購入したり、友人や親戚に電話をして間接的に別れを告げたりします。不平を言ったり、叫んだり、政治や社会の状況を批判したり称賛したりして自分の感情を表す人もいます。それは個人的な場であったり、SNS を通じてであったり、執筆や撮影を通じて行われたりします。

しかし、数日前、私たちの家が爆撃を受けた後に気づいたことがあります。爆撃の結果、隣の建物が崩れた際に発生した煙と火薬、爆発物の混ざった匂いが私たちの鼻をつきました。その中で私たちはまたしても奇跡的に生き延びたのです！でも、その時に私が特に注目したのは、子どもたちが言葉では何も語らず、ただ泣き叫び続けたり、絶え間ない暴力的な行動で恐怖や不安を表現しているということでした。戦争が続くにつれ、親たちも自分の殻に閉じこもり、戦争を耐える力が弱まり、子どもたちへの関心も薄れていきます。その結果、子どもたちは放置されがちになり、危険にさらされることが多くなっています。そして、多くの子どもが仲間同士のけんかで負傷し、病院に運ばれることもあります。戦争が始まってから私はよく子どもたちに关心を持ち、話をしたり一緒に遊んだりしていました。だから、自宅が爆撃を受けた後、自分にこう問いかけました。「もし全員が殉死したらどうなるのだろう？」と。

2週間前、12歳の孫娘であるローマンスが、どうしてもレストランでシャワルマを食べたいと言い出しました。「席に座って、テーブルに手を組み、コーラがないなら氷水でいいから、昔のように楽しい外出がしたい」と。それで私は決めました。これが最後の食事になるかもしれないから、子どもたち全員とその母親たちをレストランに連れて行こう、と。

1歳3か月の最年少の孫娘フーアにとっては、これが初めてのレストラン体験でした。彼女はとても喜び、この外出が子どもたちにとって素晴らしいものになったと感じました。ちなみに、3歳や4歳の孫たちもレストランの記憶が薄れており、彼らにとっても新しい体験になりました。

ガザでは輸入玩具がほとんどなく、子ども向けのおもちゃがほぼ途絶えている状況ですが、以前ならフーアの年齢の子どもには専用の遊び部屋がありました。そこで私はフーアのためにおもちゃを買わなければと思い、市場へ行き、カウンター型のおもちゃを見つけそれを買いました。彼女が気に入るとは確信出来てはいませんでしたが、彼女はそれを手に取

り、自分のものであると理解し、喜びと幸せでいっぱいの表情でしっかり抱きしめ、すぐに遊び始めました。最も重要なのは、彼女がこのおもちゃが自分専用の特別なものであると感じたことです。

子どもたちはおもちゃのことを知っています。そして直感的に、多くのことを感じ取ります。そのため、子どもたちが試し、体験すべきものを奪ってはいけません。それが最後の食事や最後のおもちゃになるかもしれないからです。なぜなら、私たちの家はこれまで3回も死が壁をノックし、その壁が崩れ落ちる中で奇跡的に生き延びてきたのです。そして、その過程で、私たちは家族を失い、自分たちがただの偶然によって生きていることを痛感しているからです。

2024年8月15日

アリー・アブー・ヤースィーン

訳 藤田ヒロシ